いつもそこにある〈可能性〉

――サミュエル・ハートリブとニューイングランド――

佐　藤　憲　一

1．サミュエル・ハートリブ：伝記と現代的評価

サミュエル・ハートリブ（Samuel Hartlib; c.1600-1662）は1600年頃、バルト海沿岸の都市エルブロング（Elbląng［現ポーランド、当時はプロシア］）に生まれる。父は商人で、母は近隣のダンツィヒ（Danzig）にイングランドから移住してきた家の娘であった。ハートリブは、1614年、ケーニヒスベルグ大学に入学したとされ、1625年から26年にかけてはケンブリッジ大学に学び、ベーコン主義の洗礼を受けたとされるが、彼のイングランド移住以前の若年期について詳しいことは明らかではない[1]。

1627年にケンブリッジから故郷のエルブロングに戻るものの、1628年にエルブロングがカトリック勢力の支配下に入ると同時に、プロテスタントであった彼はイングランドに移住する。ハートリブは、ロバート・ボイル（Robert Boyle）やアイザック・ニュートン（Isaac Newton）のように、科学史的にみて重要な法則や原理を発見したわけではない。また、フランシス・ベーコン（Francis Bacon）のように、体系的な方法論を構築したわけでもない。ハートリブは「さまざまな知識や考え方を17世紀半ばのイングランドに移入した」（Greengrass 18）知識あるいは知識人のコーディネーターであった。

生前、彼の名声は、イングランドにとどまらず、ヨーロッパや北アメリカにも及んだ。それにもかかわらず、1662年の死後約250年の間、彼の存在はほとんど忘れ去られてしまう。19世紀末に刊行された『国民伝記事典』（*DNB*）にはエントリーこそあるものの、生没年など基本的な事項の信頼性に欠ける。ハートリブが学問的な注目の対象とされるのは1933年にシェフィールド大学のジョージ・ターンブル（George Turnbull）による「ハートリブ文書」の発見以降のことである。ハートリブが生前書き残した膨大な量の原稿類は、死後すぐに、数学者でロンドン王立協会特許状取得時のメンバーでもあるウィリアム・ブレアトン（William Brereton）が買い取った後、曲折を経て[2]最終的にハンス・スローン（Hans Sloane）の手で大英

図書館に寄贈される。以後 1933 年にターンブルがほとんど手つかずのままの「木製の箱に入った 68 束の文書」(Greengrass 4) を発見するまで、サミュエル・ハートリブは彼の書き残した膨大な量の文書とともに忘れ去られていた[3]。

ターンブルは彼の発見の成果を『ハートリブ、デュアリー、コメニウス：ハートリブ文書からの抜粋』として 1947 年に刊行する (Turnbull [1947])。実質的にハートリブの現代的評価はこの書物から始まるといってよい。以後 1960 年にはトレヴァー-ローパーが、1970 年にはチャールズ・ウェブスターが、ハートリブを当時の社会的・政治的・文化的コンテクストに布置する貴重な試みを行っている (Trevor-Roper [1960] ; Webster [1970]) ものの、ハートリブの重層的かつ多様な知的営みに重点的に焦点をあわせた成果は、1994 年の『サミュエル・ハートリブと普遍的改革』(Greengrass 1994) を待たなければならなかった。18 人の著者による 18 篇のエッセイが収録されているこの論集が取り扱う範囲は、教育哲学、論理学、千年王国主義、暗号学、普遍言語、錬金術、ナチュラル・フィロソフィー、造園術、園芸学などに及んでおり、17 世紀のイングランドにおけるヴァーチュオーゾ[4]の多様かつ重層的な知的関心が、今日のあらゆる学問分野をたやすく横断してゆくということをよく物語っている。

一方、日本国内においては、1960 年と 61 年に濱林正夫がハートリブの伝記的事実や思想、著作等を概説的に紹介して以来 (1960;1961)、ハートリブの作とされた『有名なマカリア王国に関する記述』[5]をユートピア文学の観点から論じた田村秀夫 (1975) や、内乱期の経済史・農業史の観点からハートリブの「全体像」を論じる試みを行った芳賀守 (1980 ; 1992) がまとまった研究成果を残している。また、近年では相馬伸一が教育思想史の観点からハートリブ・サークルにおける知識の連関構造に着目した研究成果をあげている (2001)。

本論はこうした国内外の先行研究の成果に立脚したうえで、それらが紙幅をさかなかった事柄について考察を加えるものである。田村秀夫はかつて、『有名なマカリア王国に関する記述』が、作者とされるハートリブの知的関心の広大さゆえに、さまざまな解釈を成立させてしまうことを認めたうえで、「研究対象の全体像の把握が前提されなければ、その解釈は一面化し、独断化する危険がある」(14) と指摘した。しかしながら、「一面化し独断化」しない「全体像」などありえない、ということもまた事実である。したがって、本論では 17 世紀において既に「無数のキュリオシティーの達人」("Master of Innumerable Curiosities [6]") として知られていたハートリブの「全体像を把握」することをあえて放棄する。本論はきわめて局地的な視点からサミュエル・ハートリブを捉えなおし、彼をニューイングランド植民地との関連に布置する試みである。

2.『マカリア』の実用性

1628年に生地のエルブロングがカトリック勢力の支配下に入ると同時にイングランドに移住した後のハートリブは、「全世界の改革」("the reformation of the whole world[7]") を念頭におき、実用的かつ世俗的な次元で、さまざまな分野の改革の促進に努めた。彼が1641年に出版した『世にも名高いマカリア王国に関する記述』というパンフレットには、ハートリブが（あるいはハートリブ・サークルが）実現を目論んだ世界のあり方がフィクションという形で素描されている[8]。

「マカリア王国」から帰ってきた「旅人」("Traveller") と「修士号」("Master of Arts") を持つ「学者」("Schollar") との対話という形式で描写される「マカリア王国」の姿は、たとえば、「旅人」によって語られる次の一節を読む限りでは、ともすれば荒唐無稽なユートピア物語に見えてしまうかもしれない。

> In a Kingdome called Macaria, the King and the Governeours doe live in great honour and riches, and the people doe live in great plenty, prosperitie, health, peace, and happinesse, and have not halfe so much trouble as they have in these European Countreyes. (81)

しかし、『マカリア』を単なる「ユートピア文学」として読み解いてしまうことは、『マカリア』というテクストを特徴付けている戦略を完全に無視してしまうことを意味する。次に示す引用文の中で、たしかに「学者」は、「トマス・モア閣下の『ユートピア』と、われらがベーコン卿の『ニューアトランティス』を熟読しました」と述べる。このことから、『マカリア』が『ユートピア』と『ニューアトランティス』の明白な影響下で書かれたことは容易に指摘できる。ところが、そのすぐ後の記述に注目するなら、『マカリア』が、『ニューアトランティス』と『ユートピア』というふたつの先行テクストにある一定の距離をおいているということが確認できる。「学者」は、それら2冊の書物に満足しないのである：

> Sch[ollar]. I have read over Sr *Thomas Mores Utopia*, and my Lord Bacons *New Atlantis* ... but none of them giveth mee satisfaction, how the Kingdome of England may be happy, so much as this discourse, which is brief and pithy, and easy to be effected, if all men be willing. (86)

『マカリア』のテクストはまず、自らをある安定的なジャンルに帰属させるるためにふたつの先行テクスト――『ユートピア』と『ニューアトランティス』――に言及する。そして同時に、自らが言及した先行テクストとの差異を明示する。このように『マカリア』のテクストが、自らの存在意義を主張するために、自らが帰属させたジャンルとの差異を強調するという戦略をとっているということは容易に指摘できる。

では、『マカリア』のテクストと先行テクストとの差異はどこに設定されているのか。それを説明するためにまず、このテクストが生産された同時代的な状況を指摘しておく。『マカリア』という小冊子は、1641年に議会に対し社会改革に関する議決を取りまとめるよう求めた請願として書かれた。現在「序文」として残っている約2ページにわたる文章は、1641年に議会演説として読み上げられたものである。先行テクストとの同一性と差異とを同時に強調する戦略はむしろこの「序文」にもっとも明確な形で姿をあらわしているといえる：

> ...I have adventured to cast in my widows mite into the Treasurie; not as an Instructor ... to this Honourable Assembly, but have delivered my conceptions in a Fiction, as a more mannerly way, having for my pattern Sir *Thomas Moore*, and Sir *Francis Bacon* once Lord Chancellour of *England*.; and humbly desire that this honourable Assembly will be pleased to make use of any thing therein contained, if it may stand with their pleasures, and to laugh at the rest, as solace to my minde, being enclined to doe good to the publick. (80)

このように、『マカリア』というフィクションのテクストは極めて現実的なレベルでの〈実用性〉を強調している。『マカリア』と、その「序文」によって明示されているふたつの先行テクストとのあいだに設定されている差異は、『マカリア』が先行テクストよりも〈実用的〉であるという1点に収斂するのである。『マカリア』において『ユートピア』や『ニューアトランティス』が言及されるとき、その直後に必ず書き込まれているのは、それら先行テクストの不備を指摘するくだりであり、また、『マカリア』というテクストが「使える」要素を含んでいるというメッセージなのだ。

本論において『マカリア』のテクストが〈実用的〉であったという場合、それがテクスト外的世界の〈現実〉において〈実用的〉であったと主張しているわけではない。本論の主張は、あくまで『マカリア』及びその「序文」のテクストの〈戦略〉としての〈実用性〉を指摘するものである。濱林正夫は、「トマス・モアやフラン

シス・ベーコンをモデルとするという序文の中の言葉も、このパンフレット［『マカリア』］の性格をよくしめしている」（［1960］779）として、『マカリア』をハートリブの「現実的な政治的関心からはそれた」もの、つまり「現実と切り離された文字どおりのユートゥピア（ママ）という性格をつよくもつもの」（［1960］779）と規定した。本論は、『マカリア』のテクストがモアとベーコンとをモデルにするという「序文」の言葉によってつよく性格付けられているという前提においては濱林と立場を同じくする。しかし、到達する結論は正反対である。モアやベーコンの名前や著書がそのテクスト内に書き込まれているからといって、『マカリア』はユートピア文学の枠内に閉じ込められるわけではない。そうではなくて、これら2人の名前は、『マカリア』のテクストが自らの〈実用性〉を引き立たせるために言及されているのである。また、田村秀夫は『マカリア』を「ルネサンス・ヒューマニズムからピューリタニズムへ」（52）と発展してゆくハートリブの「思想の原型」（52）と規定したうえで、『マカリア』の背後にあった「広範な民衆の革命的エネルギーの高揚」（52）が「一定の革命的な役割」（53）を果たしたと述べた。このような素朴反映論的な意義付けも本論の立場とは相容れない。そもそも『マカリア』がハートリブの単著であるとはっきり断言できない以上、『マカリア』のテクストとハートリブの思想とを一対一に対応させて論じることはできない。本論の関心はむしろ、その〈実用性〉をフィクションという形で提示したテクストに冠せられた題名『有名なマカリア王国に関する記述』における「マカリア」という語それ自体である。

3．『マカリア』／「山の上の説教」／「キリスト教的慈愛の雛形」

1639年にイングランドでモアの『ユートピア』の英語版『ユートピア共和国』[9]が出版された。ギリシャ語で「否」を意味する“ου”（“ou”）と「場所」を意味する“τοπος”（“topos”）とを結合し“utopia”という語を造ったトマス・モアは、『ユートピア』の中で、「ユートピア」からさほど離れていない場所に住む住民を「マカレンス人（“Macarenses”）」と呼んだ。これはギリシャ語で「幸福な・至福な」を意味する「マカリア」（“μακαρια”; “makaria”）からの造語である。これらの事実を踏まえるなら、『マカリア』という題名における「マカリア」という語が、モアの『ユートピア』の明白な影響下にあるということは容易に指摘できる。しかし、「マカリア」という語それ自体をさらに考察することで、このテクストが強調する〈実用性〉を、同時代の別のテクストとの関連で指摘することが可能となる。

「幸福な・至福な」を意味するギリシャ語の“μακαρια”（“makaria”）という語は、もともと「神々にとっておかれた表現」（Luz 292）であった。その語は「完全

な、そしてこれに勝る幸福はないという意味」(Luz 292) における「幸福・至福」を意味した。そして、"μακαρια"の形容詞複数形の"μακαριοι"("makarioi") という語は、新約聖書の「マタイ福音書」第5章3節から11節においてイエスが8つの戒律を述べるさいに用いられた[10]。欽定訳聖書では "Blessed are..." と訳されているこれら8つの戒律に対応するギリシャ語は、すべて"μακαριοι..."(「幸いなるかな...」) という表現なのである。

以上をふまえれば、「マカリア」という語が、「「神学」ではなく、イエスの戒律」(Luz 266) であり、「キリスト教的実践」(Luz 260;傍点筆者) の重要性を説いた「マタイによる福音書」の第5章3節から11節を――それが意識的であったにせよ無意識的であったにせよ――喚起する可能性があったということが指摘できるのではないか。そしてこのことは、『マカリア』というテクストを、これまで考えられてこなかった別のテクストとの連関で考察するための視座を提供するはずである。

「マタイによる福音書」の第5章から第7章は通例、5章1節の「イエスはこの群集を見て山に登られた」("And seeing the multitudes, he went up into a mountain") という記述から「山の上の説教」("The Sermon on the Mount") と呼ばれる。『マカリア』が議会に提出される11年前の1630年に、同じ「山の上の説教」の5章14節(「あなたがたは世の光である。山の上にある町は、隠れることができない」;"You are the light of the world. A city that is set on a hill cannot be hid.") を引用した高名な演説[11]が行われた。後にマサチューセッツ植民地初代総督となるジョン・ウィンスロップ (John Winthrop) がボストンへと向かう船上で説いた「キリスト教的慈愛の雛型」("A Model of Christian Charity") がそれである。ニュー・イングランド植民地建設のための現実的な必要性に迫られたこの演説の結びの部分では、自分達が神や他人から見られているのだ、ということが強調される:

> We shall find that the God of Israel is among us...when He shall make us a praise and glory, that men shall say of succeeding plantations: the Lord make it like that of New England. For we must consider that we shall be as a City upon a Hill, the eyes of all people are among us; so that if we shall deal falsely with our God in this work we have undertaken, and so cause Him to withdraw His present help from us, we shall be made a story and a by-word through the world. (Winthrop 10)

新大陸アメリカに新たな共同体を形成しようとするさいに説かれたのは、神や他人の監視のもとに新しい共同体を作り上げるという意識、つまり自分達が理想的な共

同体の〈モデル〉を作っているという意識であった。「山の上の説教」はその〈モデル〉構築のための現実的な戒めとして言及されたのである。

1641年に議会に提出された『マカリア』のテクストは、自らの〈実用性〉を強調した。そして、そのタイトルの「マカリア」という語は、従来考えられてきたようにモアの『ユートピア』のマカレンス人を指示するだけにとどまらず、新約聖書の実践的な戒律である「山の上の説教」の冒頭部をも指示する可能性がある。一方で、この「山の上の説教」は、ジョン・ウィンスロップが「キリスト教的慈愛の雛型」において明示的に言及されている。「山の上の説教」を媒介させることによって、このふたつのテクスト――『マカリア』と「キリスト教的慈愛の雛型」――のあいだの距離は確実に縮まってくるのだ。

『マカリア』の長いフルタイトル[12]の中には、「他国の模範」(*"An Example to other Nations"*) という記述が含まれている。また、対話の中にはイングランドをマカリア王国「のように」しなければならない、という記述が2箇所ある。議会に提出した改革案としての『マカリア』と、これからともに新しい共同体を建設する人々を前にして説かれた「キリスト教的慈愛の雛型」とは、「山の上の説教」という共通の土台に立ち、ともに理想社会を構築するための実践的な〈模範〉あるいは現実的な〈モデル〉を提示するという共通の手法を用いている。このことは、1641年の時点で既に『マカリア』というテクストが単なる「ユートピア文学」以上の要素をはらんでいた可能性を示唆する。そして、最晩年のハートリブはこの可能性を現実に変換しようと努めるのだ。

4.『マカリア』を「目に見える存在」に

ハートリブがイングランド移住前後から理想的共同体の建設を具体的な形で企図していたということはよく知られた事実である。彼の生涯には2度、この共同体計画が具体的に言及される時期がある。その最初は、イングランド移住直前の1628年ごろから1633年ごろにかけてのことである。この時点でその共同体は「アンティリア」(*"Antilia"*)[13]と呼ばれており、建設の候補地としてヴァージニアやニューイングランドがあげられていた (Turnbull [1947] 69-73)。2度目はハートリブの最晩年、1658年から61年にかけてのことである。この時期になると、共同体はときには「アンティリア」と呼ばれ、またときには「マカリア」と呼ばれるようになる。〈実用性〉を強調したフィクションの題名であった「マカリア」という語が現実に企図された共同体の呼称として用いられるに至るということは、ハートリブが1660年1月30日付のジョン・ワージントン (John Worthington) に宛てた書簡の

中の一節から確認できる：

> I hope that *Macaria* will have a more visible being before that time, and then he shall need none other additional patronage. (Webster [1970] 196)

『マカリア』を「目に見える存在」にする。この時期のハートリブはそのためにさまざまな活動を行っていた。同じ書簡の中でハートリブはワージントンに、ある人物が「マカリア」のための資金援助を得るために、デンマーク王のもとへ向かったことを報告している。当時のハートリブは、まず学識ある人々をパトロンの資金援助のもとに「協会」として組織し、彼らが民衆を啓蒙して「マカリア」という理想的な共同体を作ろうとしていた、と推測される。1660年の王政復古により議会からの資金的な援助を断たれたハートリブの当面の急務は、新たなパトロンを探し出すというものであった。彼のもとに旧知の間柄である、コネチカット植民地総督ジョン・ウィンスロップ・ジュニア（John Winthrop Jr.）から書簡が届くのもほぼ同時期の1660年3月8日のことである。

ニューイングランド植民地最初のロンドン王立協会員であったウィンスロップ・ジュニアは、ニューイングランドのヴァーチュオーゾとして名高い。彼は知識欲旺盛な人物で、化学あるいは錬金術、医学、天文学などといった17世紀イングランドで隆盛を極めた諸分野に造詣があり、植民地の内科医としても活動した。

父に遅れること1年5ヶ月後の1631年11月4日にニューイングランドに移民して以来、1676年に死去するまで3度、イングランド本国に一時帰国をしているウィンスロップ・ジュニアが、ハートリブと面会し面識を得たのは、1641年の2度目の一時帰国に際してのことである。ウィンスロップ・ジュニアの伝記作者ロバート・C・ブラック（Robert C. Black）によると、彼は1641年8月3日にニューイングランドを出発し、同年9月28日にはイングランドのブリストルに着岸した。その後、すくなくとも10月8日まではブリストルに留まっていた。それ以降の彼の足取りについては詳しいことは明らかではないが、ある時期にイングランドを離れて大陸に足を伸ばし、ハンブルグやアムステルダム、ヘイグ、ブリュッセルといった都市を訪れ、1643年の1月初旬に彼の故郷であるサフォークに戻ったということは確認されている。彼がイングランドを発つのは1643年9月のことであった（Black 111-16）。ウィンスロップ・ジュニアが、この約2年に及ぶ一時帰国のあいだにハートリブと面識を得たということは、彼がハートリブに宛てた1659年12月16日付の書簡の冒頭から確認できる：

> I had once the happinesse to be acquainted with you when I was last in England since which tyme being about the beginning of the first Parliament I have lived in these remote western parts of the world in New-England. (Turnbull 37)

ハートリブはイングランドの長期議会が始まったばかりのころ——『マカリア』を議会に提出する1641年ごろ——にウィンスロプ・ジュニアと実際に面会し、さほど親密とはいえないが、しかし確かな関係を築いた。そして1660年にふたりの関係は約20年のブランクを経て回復するのである。

1660年の3月8日に旧知の友人からの手紙を受け取ったハートリブはその8日後の3月16日付で返事を書く。彼はその書簡の中で、「海を越えてイングランドに入ってきた」という「ある協会」に言及し、「私はあなたに彼らの考え方を託します」と述べる：

> I am enabled by a sweet secret province to tell further...that such a society is discovered that is and will be (which I count far more), not onely a true possesor, but a reall dispenser of these Mysteries for the ends for which God hath as stewards entrusted them withall. They are come from beyond seas into England and are still in those parts though most secret and hidden. They put a declaration or invitation to their society before this time but the extreamest dissettlement hath differed their resolution....Here I entrust you with the Idea of some of their contrievances; all this out of singular love and great faithfulness into your bosome. (Turnbull [1963] 47-48)

この書簡とともにハートリブがニューイングランドに送付した物品リストの中に“A modell of Christian Society“（Turnbull [1963] 56）という項目がある。これは何か。

ハートリブが1610年代に架空の秘密結社「薔薇十字団」のマニフェスト[14]を相次いで出版したとされるヨハン・ヴァレンティン・アンドレーエ（Johann Balentin Andreae）の影響下にあったということはしばしば指摘される。1610年代、ハートリブは中央ヨーロッパのケーニヒスベルグ（Königsberg）でこれらの文書が巻き起こした知的熱狂をリアルタイムで経験し、後年にはアンドレーエとも書簡を交わした。また、前述のハートリブ文書からは、アンドレーエによる4点の薔薇十字文書のほかに、同じくアンドレーエによる2冊のパンフレットが発見された。*Amoris Dextera Porrecta*（1919）および、*Christianae Societatis Imago*（1920）と題されたこ

れらのパンフレットは、まったく架空の団体であった薔薇十字団とは対照的に、アンドレーエが実際に組織したとされる、「キリスト教協会」(“Societas Christiana”)なる団体の青写真を描いたものである。ハートリブは『マカリア』を出版した6年後の1647年に、自らのコーディネートでこれら2冊のパンフレットの英訳をそれぞれ、*The Right Hand of Christian Love Offered* と、*A Modell of a Christian Society* という題のもとで出版する。その英訳者のジョン・ホール（John Hall）は *A Modell of a Christian Society* の序文をハートリブに捧げた。そこには、ハートリブが「中央ヨーロッパ」(“Germanie”) に実在した「協会」の会員と実際に面識があったということと、その「協会」が最初に設立した場所での活動を停止したままで、活動はまだ再開されていないということが明言されている：

> Your self (who were acquainted with some members of this Society in Germamie) can witnesse tis more than an Idea; and tis a great deal of pity both that warre discontinued it where it was first instituted: and that it is not again revive'd.... (Turnbull [1955] 151)

ハートリブが1660年にウィンスロップ・ジュニア宛てに送った物品のリストの中にある “A modell of Christian Society” とは、1641年に自らがコーディネートして出版したアンドレーエの英訳、*A Modell of Christian Society* であった。ということはつまり、ハートリブがウィンスロップ・ジュニアに宛てた書簡の中で言及した「ある協会」とは、ホールの序文に明示されている「中央ヨーロッパにあった協会」、具体的には、アンドレーエによる「キリスト教協会」であると考えてよい。ハートリブは1660年ごろになってその活動を再開させるための努力をするのである。

現存する史料から、ハートリブは、死の前年まで、継続的に「協会」の活動再開を画策したことがわかる。1661年6月26日付けのワージントンに宛てた書簡には、

> Of the Antilian Society the smoke is over, but the fire is not altogether extinct. It may be it will flame in due time, though not in Europe. (Turnbull [1947] 73)

という記述がある。これは従来、ハートリブが自ら建設を目論んだ共同体に言及した最後の手紙（Turnbull [1947] 73）とされてきた。しかしハートリブは、名前こそはっきりと言及しないものの、この書簡の約5ヵ月後にウィンスロップ・ジュニアに宛てた書簡の中で「協会」に言及する。彼は、その「協会」をヨーロッパの外に設立するということが既に規定路線であるという旨をウィンスロップに伝える：

> The designed society, which I sent you, is not put in practice, ye Principal Leaders judging Europe no ways worthy of it. They intend to erect the said foundation in some other part of the world. (Robert C. Winthrop 12)

ヨーロッパの外に「協会」を作ろうとする動きがある、ということをわざわざヨーロッパの外にいるウィンスロップ・ジュニアに伝えた、ということはいかなる意味を持ちうるのだろうか。パトロンを探し出すという急務に追われているハートリブのもとに届いた旧知の友人からの1通の手紙は、ハートリブの頭の中に自らが理想とする共同体をニューイングランドに建設するという考えを再燃させた可能性が非常に高い。先にふれたとおり、1630年前後のハートリブ周辺の理想的な共同体建設計画においては、ヴァージニア及びニューイングランドがその候補地として検討された。そして1660年ごろに復活する同種の計画においてもやはり、ニューイングランド植民地が候補地となるのである。自らの〈実用性〉を強調したフィクションとしての『マカリア』が「目に見える存在」に姿を変えようとするとき、「マカリア」はふたたびニューイングランドを指向する。

しかし、先に引用した1660年3月8日付の書簡の中でハートリブから「協会」に関する意見を求められたウィンスロップ・ジュニアの反応は至極冷静であった。1661年1月7日付のハートリブ宛ての書簡で彼は次のように述べる：

> I have read over that booke De societate Christiana, and that other you mentioned which I borrowed lately of our worthy friend Mr. Davenport.... The scope of them is of singular matter and worthy consideration, but whether there be really such a Christian Society in Germany or else where is worth the inquiry. (Turnbull [1963] 66)

2人の往復書簡は1661年10月9日にハートリブが当時ロンドンに一時帰国していたウィンスロップ宛に送ったきわめて事務的な書簡を最後に途絶えているため、ハートリブが企図した「協会」がその後いかなる道筋をたどって消えてしまったのか、詳しいことは明らかではない[15]。しかし、晩年のハートリブが『マカリア』を「ヨーロッパの外のどこか」で現実に変換することを画策し、その目論見を知らされたウィンスロップ・ジュニアはその現実性について極めて慎重に対処したということは現存する史料から明白である。ニューイングランド植民地建設のための言説――「キリスト教的慈愛の雛型」――と共通の土台に依拠しながら強調された『マカリ

ア』というフィクションの〈実用性〉は、そのテクスト外的現実における――あるいは「ヨーロッパの外」の現実における――実効性が確認されないまま、消え去ってしまう。

5．サミュエル・ハートリブとニューイングランド

ハートリブはたしかにニューイングランドを具体的な「改革」の対象として考えていた。このことは、1640年のハートリブの『日記』[16] (Ephemerides) 中の記述から明らかである。ハートリブはこの時点でニューイングランドの「改革」(reformation) の手法に対して否定的であったようで、「ニューイングランドの人々は、とりわけ学知の改革という面においては有効な手段をもっているというわけではない」("Those of New England are lesse capable of the means of Reformation especially in learning") と『日記』に書き記した。「学校と大学」。ハートリブにおいて、ニューイングランドの問題はそこに集約される：

> So wee see in New England the matter of schooling et vniversities. (30/4/53A-60B)

先に確認したとおり、『日記』にこのような一節が記された1年後の1641年、ハートリブはウィンスロップ・ジュニアと親交を結んだ。そして、そのさいにハートリブは、当時イングランドを訪れていたボヘミア生まれの教育改革家、ヤン・アモス・コメニウス (Johann Amos Comenius) をウィンスロップ・ジュニアに引き合わせた。このことはウィンスロップ・ジュニアが後年、サミュエル・ハートリブ宛てに送った書簡の中に次のような記述があることから明らかである：

> Whether that learned mr. Comenius be yet living and where; and what remarkable from him etc. I meet him once.... (John Winthrop Jr. to Samuel Hartlib, Dec. 16, 1959; Turnbull ed. [1969] 39)

しかし、ウィンスロップ・ジュニアは単に「かつてコメニウスに会った」だけではない。彼はコメニウスを、創設したばかりのハーバード大学に学長として招こうとした。以下は、コットン・マザー (Cotton Mather) による「ハーバード大学の歴史」[17] の中の証言である：

> The brave old man Johannes Amos Commenius, the *fame* of those worth hath been *trumpetted* as far as more than *three* languages (whereof every one is indebted to his *Janua*) could carry it, was indeed agreed withal, by our Mr. Winthrop in his travels through the *low countries*, to come over into New England, and illuminate this Colledge and *country*, in the quality of a President: But the solicitations of the Swedish Ambassador, driving him another way, that incomparable Moravian not an American. (II 14)

ウィンスロップ・ジュニアとコメニウスは、いつ、どこで邂逅したのか。この点に関してはこれまで明確な判断がなされないまま、ふたつの可能性が指摘されてきた。

第一の可能性は、1641年から翌42年の6月までの間に、ロンドンで会った、というものである。コメニウスはハートリブの熱心な招きにより同年9月21日にロンドンを訪れた（Young 11）。これはウィンスロップ・ジュニアがブリストルに到着する時期（9月28日）とほぼ重なる。コメニウスがイングランドを後にするのが翌1642年の6月21日のことであるから（相馬 53）、同日以前に、コメニウスが滞在していたロンドンにおいてウィンスロップ・ジュニアが彼と会見するのは十分可能である。

第二の可能性は、ふたりが大陸のどこかで――おそらくアムステルダムまたはライデン（Leiden）周辺で――邂逅したというものである。その場合、時期は6月21日以降となる。コメニウスはロンドンを離れ、同年10月にライデンでデカルト（Descartes）と会見した記録が残っている。一方、ウィンスロップ・ジュニアは1642年9月初旬にハンブルグを発ちアムステルダムへと向かったという記録がある（Black 114）。ウィンスロップ・ジュニアは翌43年の1月[18]にイングランドに戻っているため、彼が1642年の9月から12月の間に、大陸のどこかでコメニウスと邂逅した可能性が指摘できる。そしてこれは、上に掲げたマザーの引用文中の「低地帯の国々」（"the *low countries*"）という言葉とも合致する。

ウィンスロップ・ジュニアの伝記作者、ロバート・C・ブラック（Robert C. Black）も指摘しているように、このふたつの可能性の成否について決定的な判断は下せない。しかし、状況証拠から一定の推論を立てることはできる。ハートリブがコメニウスをロンドンに招いたのは何のためだったか。そもそもコメニウスは、彼の汎知学を「普遍カレッジ」の設立という形で具現化させるために、議会からの要請にしたがって、ハートリブを介してイングランドに招かれた（相馬 47-52）。結局この構想は実現せず、内乱の激化によってコメニウスはイングランドから脱出する。こうした状況を考慮すれば、ウィンスロップ・ジュニアが、ロンドンに到着し

たばかりのコメニウスに早速ハーバードの「学長」就任を働きかけたという可能性は、完全に否定はできないものの、説得力に欠ける。むしろ、イングランドにおける普遍カレッジの計画が頓挫し、イングランドを脱出した後のコメニウスに、ニューイングランドにおいて同様の計画を実現させようとした、という可能性の方がより説得力があると考えられる。

ハートリブは、コメニウスをウィンスロップ・ジュニアに引き合わせることによって、イングランドで実現されなかった「普遍カレッジ」構想をニューイングランドで実現させようとしたのである。しかしながら、マザーの証言にあるように、コメニウスは「アメリカ」ではなく「モラヴィア」(現在チェコスロヴァキア中部)に向かった。ハートリブのニューイングランドにおける教育改革の目論見もやはり実現しないのである。

6．結び

17世紀において、〈ユートピア〉の実現を極めて現実的なレベルで見据えたさい、その視線が第一にたどり着くところは、当時建設中であった実験共同体としてのニューイングランド植民地であったのだろうか。ハートリブが自らの社会・教育改革をニューイングランドで実現させようとしたということは、この問いに一定の解答を与えるものと考えられる。しかし注意しなければならないのは、1630年前後の「アンティリア」計画にせよ、1641年前後の「普遍カレッジ」計画にせよ、また、1660年前後の「マカリア／アンティリア／キリスト教協会」計画にせよ、ハートリブの理想はことごとく実現しなかった、ということだ。ハートリブにとってのニューイングランドは永遠に〈可能性〉の域を出ない。

従来ハートリブは、もっぱらイングランド国内の、あるいは生地である中央ヨーロッパの政治的、宗教的、および科学的コンテクストに布置される傾向にあり、ニューイングランド植民地との関連性についてはこれまで言及されてこなかった。よって本論が試みたように、ニューイングランド植民地との関連でハートリブを考察したうえで、『マカリア』と「キリスト教的慈愛の雛形」の類似性を、あるいはサミュエル・ハートリブとジョン・ウィンスロップ・ジュニアとの知られざる人脈を学問的議論の俎上に上げることは、従来のハートリブ研究に新しい視点をもたらすと同時に、近年〈ピューリタン中心主義〉的発想からの脱却が主潮流となりつつあるニューイングランド研究にとっても有益なものとなるはずである。

注

1　ハートリブの詳しい伝記に関しては、Turnbull [1947]（1-33）を参照のこと。

2　ハートリブ文書の発見に関する詳しい経緯については、Greengrass（4-8）を参照のこと。

3　現在、「ハートリブ文書」はシェフィールド大学から CD-ROM の形で出版されている。詳細に関しては "The Hartlib Papers Project" のウェブサイトを参照：
http://www.shef.ac.uk/uni/projects/hpp/　（2002 年 12 月 15 日）

4　17 世紀においてヴァーチュオーゾ（"virtuoso"）とはあらゆる現象を経験的に記述する「博物誌」(natural history)、あるいはあらゆる現象の原因や原理を解明する「自然科学／物理学」(natural philosophy) などといった研究に従事した者をさし、"experimental philosopher" や "new philosopher" とほぼ同義で用いられた。

5　*Description of the Famous Kingdome of Macaria.* 1641. Rpt. in Samuel *Hartlib and the Advancement of Learning.* Ed. Charles Webster. Cambridge: Cambridge UP, 1970: 79-90. 以下、単に『マカリア』と表記する。なお、本論における『マカリア』からの引用はすべて同版により、かっこ内に当該のページ数のみを記して引用する。

6　*The Diary of John Evelyn.* Ed. E. S. de Beer. London, 1959: 364. Qtd. in Greengrass (12).

7　Hartlib's letter to Boyle, 15. Nov., 1659. Qtd. in Trever-Roper ([1967]269).

8　チャールズ・ウェブスターは、ハートリブではなく、ハートリブ・サークルと関係のあったプラッツ（Gabriel Plattes）が『マカリア』の作者であった可能性を指摘している。しかし、ウェブスターは、ハートリブが『マカリア』の作成に積極的な役割を果たした可能性も否定しない (Webster [1974])。本論においては、『マカリア』をハートリブの単著であったとは規定しない。しかし同時に、その構想、起稿、出版にハートリブが深く関わっていた可能性を支持し、ハートリブが『マカリア』の〈作者ー機能〉("author function") の一翼を担っていたという立場に立つ。ハートリブと〈作者ー機能〉については、次の論文を参照のこと："Milton among the Monopolists: Areopagitica, Intellectual Property and the Hartlib Circle" in Greengrass (1994): 177-92

9　Thomas More. *The Commonwealth of Utopia: Containing a Learned and pleasant Discourse of the best state of a Publicke Weale....* London, 1639.

10　この点に関して、筑波大学文芸言語学系講師秋山学氏より貴重なご教示をいただいた。記して謝意を表します。

11　ウィンスロップは聖職者ではなかったため、「キリスト教的慈愛の雛型」は単なる "preach" または "sermon"（「説教」）ではなく、"lay sermon" と呼ばれる。本論ではこれを「演説」と訳した。

12　『マカリア』のフルタイトルは次に示すとおりである：*A Description of the Famous Kingdom of Macaria; shewing its Excellent Goveronment: wherein The Inhabitants live in Great Prosperity, Health, and Happinesse; the King obeyed, the Nobles honoured; and all good men respected, Vice punished, and vertue rewarded. An Example to other Nations. In a Dialogue between a Schollar and a Traveller.*

13　「アンティリア」とは、大西洋上に存在するとされた架空の島をさす。ヨーロッパでは中世から

大西洋の向こうに「アンティリア」と呼ばれる土地があると想像されていた。コロンブスの新世界発見後、スペイン人はハイチを「アンティリア」と呼んだ（「アンティリア」『平凡社第百科事典』）。

14 『友愛団の名声』（*Fama Fratanitais* 1614）；『全世界の普遍的かつ総体的改革』（*Allegemeine und General Reformation der ganzen weiten Welt* 1614）；1615年に同じくカッセルで出版された『友愛団の信条告白』（*Confessio Fratanitatis* 1615）；および1616年の『科学の結婚』（*Chymische Hochzeit* 1616）。なお、これら4つの薔薇十字文書には日本語訳が存在する：J. V. アンドレーエ『科学の結婚 付薔薇十字基本文書』種村種季（訳・解説）紀伊国屋、1993。

15 一見すると2人の書簡中に言及のある「協会」とは、王立協会の母体となった団体を指示するようにも見えるが、ハートリブは1660年12月17日の時点で既に、後に王立協会となる科学者集団がグレシャム・カレッジにおいて活動をしているということを認識している（ワージントン宛書簡 Webster [1970] 270）。このことは、1661年9月3日付けの手紙の段階で2人の間の「協会」が「まだ活動を行っていない」とされていることと明らかに矛盾する。よって、王立協会の母体となった協会と、件の「協会」は別のものであると考えるのが妥当である。

16 ハートリブの『日記』からの引用は、CD-ROM版の『ハートリブ文書』により、引用文のあとのかっこ内には、同文書に共通の手稿番号を付した。なお、CD-ROM版の『ハートリブ文書』の閲覧にあたっては、広島修道大学助教授相馬伸一氏のご助力をいただいた。記して謝意を表します。

17 "The History of Harvard College" in vol. II of *The Great Works of Christ in America: Magnalia Christi Americana.*

18 ウィンスロップ・ジュニアは1643年1月に匿名で「ニューイングランドの最初の果実」("New Englands First Fruit" ESTC. no. 242: E87[2]）という小冊子を出版した可能性が指摘されているが（Dunn 70-71）、詳細は明らかではない。

Works Consulted

Andreae, Johann Balentin. ヨハン・ヴァレンティン・アンドレーエ『化学の結婚』種村季弘（編訳）紀伊国屋書店，1993.

Black, Robert C. *The Younger John Winthrop*. New York: Columbia UP, 1966.

Birch, Thomas. *History of the Royal Society of London.* London, 1756-57. 4 vols.

Dickson, Donald R. *The Tessera of Antilia: Utopian Brotherhoods and Secret Societies in the Early Seventeenth Century.* Leiden: Brill, 1998.

Greengrass, Mark, et al, eds. *Samuel Hartlib: The Complete Edition.* Ann Arbor: UMI, 1995.

Greengrass, Mark, Michael Leslie, and Timothy Rayolr, eds. *Samuel Hartlib and Universal Reformation: Studies in Intellectual Communication.* Cambridge: Cambridge UP., 1994.

Haga Mamoru. 芳賀　守『イギリス革命期の農業思想：S.ハートリブの関わった農書研究』八朔社，1992.

————.『イギリス革命期の社会・経済思想』第三出版，1980.

Hamabayashi Masao. 濱林正夫「サミュエル・ハートリブにおける政治と経済と宗教」『一橋論叢』

44(1960): 771-788.

———. 「サミュエル・ハートリブの生涯と著作」『商学討究』11(1961): 103-20.

Holy Bible: Containing the Old and New Testaments. King James Version. New York: American Bible Society, 1995. (『聖書 新共同約』日本聖書協会, 1996.)

Kawabata Yukio, ed. and trans. 川端由喜男(編訳)『ギリシア語新約聖書:日本語対訳 1』教文舘, 1991.

Luz, Ulrich. ウルリヒ・ルツ『EKK 新約聖書注解 I / 1 マタイによる福音書 (1—7 章)』小河陽 (訳) 教文舘, 1990.

Mather, Cotton. *The Great Works of Christ in America: Magnalia Christi Americana.* 1702. Banner of Truth Trust, 1979.

Soma Shinichi. 相馬伸一『教育思想とデカルト哲学 ハートリブサークル 知の連関』ミネルヴァ書房, 2001.

Sprat, Thomas. *History of the Royal Society.* London, 1667. Facsimile reprint, edited by J.I. Cope and H. W. Jones. London: RKP, 1960.

Tamura Hideo. 田村秀夫『イギリス革命とユートウピア:ピューリタン革命期のユートウピア思想』創文社, 1975.

Thomson, Thomas. *History of the Royal Society, from its Institution to the End of the Eighteenth Century.* London, 1812. Rpt. Ed. Bristol, England: Thoemmes P, 2001.

Trevor-Roper, H. R. "Three Foreigners and the Philosophy of the English Revolution." *Encounter* 14(1960): 3-20.

———. *Religion, the Reformation and Social Change: And Other Essays.* London: Macmillan, 1967.

Turnbull, G. H. *Hartlib, Dury and Comenius: Gleanings from Hartlib's Papers.* London: UP of Liverpool, 1947.

———. "J. V. Andreae's Societas Christiana." *Zeitschrift fur Deutsche Philologie.* 73(1954): 407-32; 74(1955): 151-85.

———. Samuel Hartlib's Influence on the Early Royal Society." *Notes and Records of Royal Society of London.* 10(1953): 101-30.

———. *Samuel Hartlib. A Sketch of his Life and his Relations to Comenius.* Oxford: Oxford UP, 1920.

Turnbull, G. H., ed. "Some Correspondence of John Winthrop, Jr., and Samuel Hartlib." *Proceedings of the Massachusetts Historical Society* 72(Oct.1957-Dec.1960): 36-67.

Webster, Charles. *The Great Instauration: Science, Medicine and Reform, 1626-1660.* New York: Holmes & Meier, 1976.

———. *Utopian Planning and the Puritan Revolution: Gabriel Plattes, Samuel Hartlib and 'Macaria.'* Oxford: Welcome Unit for the History of Medicine, 1979.

Webster, Charles, ed. *Samuel Hartlib and the Advancement of Learning.* Cambridge: Cambridge UP., 1970.

Weld, Charles Richard. *A History of the Royal Society, with Memoirs of the Presidents.* London, 1848. 2vols. Facsimile reprint, Salem NH: Ayer, 1975.

Winthrop, John. *The Journal of John Winthrop, 1630-1649.* Abridged Ed. Eds. Richard S. Dunn and Laetitia Yeandle. Cambridge, Mass., Harvard UP, 1996.

Winthrop, Robert C. *Correspondence of Hartlib, Haak, Oldenburg, and Others of the Founders of the*

Royal Society, with Governor Winthrop of Connecticut, 1661-1672. Boston, Mass., 1878.
Yates, Francis A. *The Rosicrucian Enlightenment.* 1972. London: RKP, 2001.